

## 三井物産草創期の人員

——特に先収会社からの人員に注目して——

木 山 実

### はじめに

明治九（一八七六）年に開業した三井物産は、政府米や官営三池炭鉱の石炭取扱業務等といった、いわゆる政府御用商売から得られる利益に支えられて不安定な創業期を乗り切り、明治半ばには御用商売から軸足を民間商売に乗り換え、明治二〇年代末には今日でいうところの総合商社体制の原型を構築した。その後も、明治末期には三井物産一社で日本全体の貿易額の五分の一以上を取り扱うまでに巨大化したのであった。三井物産は海外貿易のみならず国内流通でも重要な地位を占め、まさに戦前期の日本経済に君臨した企業であった<sup>①</sup>。

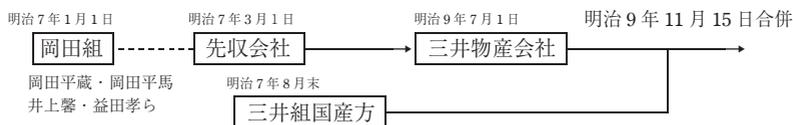
このような重要性をもつ三井物産については、そこでどのような人員が勤務したのかについて、近年かなり研究が進展したものの、それらはもっぱら明治中後期以降を対象にしたものであり、草創期の人員に関するものはあまりない。筆者はかつて三井物産草創期の人員に関する拙稿をしたためたことがあるが、それは草創期海外店舗の支配人に焦点をあてたものであった。三井物産が草創期に海外支店を急展開したのは、明治一一年から一三年にかけての時期

であり、それは輸出増進によって正貨獲得を目指す、いわゆる大隈財政期にあたる。三井物産に対して、明治政府から海外支店開設の要請があったのであり、にわか仕立てで設けられた草創期海外支店の支配人として、三井物産は万国博覧会の出展業務のため、あるいは領事館員として渡航・駐在した経験がある者などを積極的にスカウトして派遣していた。そして商法講習所や慶應義塾などの学校卒業業者をも、それらの支配人のもとに派遣し、そのような人材が現地で育つてくると、明治一〇年代後半以降は、支配人の任務はそれら学校卒業業者によって担われていったということとをそこでは指摘した。

だが三井物産の貿易業務は、それらの海外支店のみならず日本国内の開港場などの港湾都市でもなされたのであって、そこで取引相手となる外商が日本語を使ってくれるのならばよいとしても、そのようなことは稀であったろうから、日本国内店舗にも外国語の話せる人材が一定程度、必要とされたはずである。

このような点も含めて、小稿は、海外店舗のみならず国内店舗も含めたうえで、草創期三井物産にはどのような人員がいたのかということをしてだけ明らかにすることを主たる課題とする。三井物産は後述のごとく、先収会社、三井組国産方という二つの組織が合流して成り立ったのであり、三井組国産方から三井物産に入った人員については、右で述べた拙稿でもすでに具体的な人名をあげて紹介したが、先収会社については、そこにどのような人員がいて、また三井物産に入ったものはどれくらいいたのかについては、先行研究でもほとんど明らかにされていない。

筆者は、幸いこれらの事柄の一部を示す史料を何点か見いだすことができた。以下ではそれらの史料を提示しながら、上記の問題を明らかにしていくことにするが、第一節でまずは、明治九年の三井物産の成立事情を確認してから、第二節以降で本論に入ることにした。



第1図 先収会社・三井物産・三井組国産方の関係

一 三井物産の生成事情<sup>(4)</sup>

三井物産は二つの組織を前身としてもつ。一方は先収会社であり、他方は三井組国産方であるが、三井物産の成立過程は、やや複雑である(第1図参照)。

明治四年末、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允らの政府首脳が日本史上有名な岩倉使節団として大挙して欧米に向け出発したのち、政府運営は三条実美、西郷隆盛、井上馨、大隈重信などの、いわゆる留守政府によって担われていくことになる。木戸孝允や伊藤博文という長州閥筆頭格が使節団員として洋行中であつたため、井上馨が留守政府内で長州閥のリーダー格として、特に財政面で辣腕をふるつた。そして明治六年、政府内で財政縮減を主張し、各省に予算を大幅に削減することを求めた大蔵省の大蔵大輔井上馨は、政府内での抵抗勢力と対立した。特に司法卿江藤新平との確執は激しく、ついに井上馨は六年五月に政府を去るにいたつたのであつた。井上馨に才能を見いだされて、旧幕臣の身でありながら政府・大蔵省の造幣権頭に登用されていた益田孝も、井上に随従して職を辞した。

政府を去つた井上馨は起業を志し、旧知の仲にあつた商人岡田平蔵とパートナーシップにより明治六年秋、東京鉦山会社を設立する。ここでの鉦山経営に加え、貿易にも進出を図ろうと、鉦山会社を拡大するかたちで新会社である岡田組が明治七年一月に設けられた。会社のトップは井上馨が総裁、岡田平蔵が社長、頭取は益田孝という陣容であり、資本金一五万円のうち八万円を岡田平蔵とその義弟岡田平馬が、三万円を井上馨が、残りの四万円を横浜在留のアメ

リカ商社エドワード・フィッシャー商会（以下、フィッシャー商会）が出資した。このフィッシャー商会が出資者として加わったのは、益田孝がかつて大蔵省入りする以前に、横浜の別のアメリカ商社であるウォルシュ・ホール商会に勤務した経験があり、その際、益田はウォルシュ・ホール商会長崎支店長であったロバート・アルウィンと知り合いになっていたという事情があつた。アルウィンは同商会を退社して独立し、エドワード・フィッシャーとパートナーを組んで、横浜にフィッシャー商会を設立したのであつた。そのような経緯があり、ウォルシュ・ホール商会勤務時代からアルウィンが益田孝と旧知の關係にあつたことから、アルウィンの働きかけでフィッシャー商会が岡田組に出資することになったものと考えられている。

そうして岡田組は発足したものの、その発足直後に岡田平蔵が急死してしまうのである。そこで岡田組はいったん解体し、岡田家の出資分、鉾山業務の一切を岡田家に譲渡することにした。そして岡田家との關係を絶ち、事業を縮小した上で明治七年三月に新たに設けられたのが先収会社であつた。

この先収会社は総裁井上馨のもと、東京本店と大阪店を中心に、必要に応じてさらに大津支社というような出張店を設けたようである。東京本店頭取には益田孝が、そして大阪店頭取には井上馨と同郷の長州出身の吉富簡一が就いた。

東京本店は、井上馨の明治政府とのコネクションを活かして、イギリスから輸入したラシャや銃などを陸軍へ納入する業務を中心とし、他にも東北米の買い付けなどさまざまな商取引に従事した。大阪店のほうも、井上馨の郷里山口県とのコネクションを活かして、山口県で生産・集荷されて大阪に回漕されてきた米をはじめ、紙、蠟、茶などの産物をも荷受けして売り捌くことを中心業務とした。

このように先収会社は、総裁井上馨のコネクションに大きく依存するかたちで、明治政府や山口県庁周辺から商売

上で有用な情報を得ながら、経営状態は良好であった。例えば、明治八年九月の江華島事件——朝鮮の江華島近辺を日本の軍艦が測量中に朝鮮側から砲撃が加えられ、日本側がこれに応じて兵士を上陸させて軍事的衝突となったもの——に際しても、政府に電信で入ってくる情報を、益田孝は他の商人に先駆けていち早く入手し、米価高騰を見越して大量の米を先物市場で買い付けて利益を得ている。<sup>5)</sup>

この江華島事件の事後処理のために、政府は黒田清隆を特命全權大使とする使節を朝鮮に派遣しようと計画するが、下野していた井上馨に、使節の副使として白羽の矢が立てられ、これを機に井上は政府に復帰することとなった。先取会社の経営状態は良好であったものの、明治九年に入つて会社トップの井上が政府に戻るようになったため、先取会社は解散することに決せられたのであった。

ところが同年四月ごろ、まさに先取会社が解散しようとしていた矢先、当時、政府米の売買や輸出業務の担い手を探していた大藏卿大隈重信、および三井組番頭の三野村利左衛門が先取会社東京本店を取り仕切っていた益田孝に目を付け、益田に先取会社の人員を引き連れて三井組内で商事会社を経営するよう盛んに説得工作を重ね、益田もこれに折れて、明治九年六月（会社登記上は七月）から益田孝を総括（のちに社長と改称）として三井物産会社がいよいよ開業することになったのであった。

ところで三井家にとっては、江戸時代以来の祖業たる呉服商売が永らく不振であったために、その不振が本業たる金融業に累を及ぼさぬよう、明治五年に呉服商売のほうは家業から切り離し、三越家という新たに設けた家の事業として切り替え、表面上、三井家の事業とは無関係であるように装っていた。そして三井家の主業は銀行業で行くこととされ、三井物産の成立と同時期に三井銀行が設立された。後に三井財閥の中心的企業となる三井物産も、明治九年の発足当初には、まだ好業績を出せるかどうか不確定であったため、呉服商売同様この三井物産も三井家とは無関係

であるという体裁がとられたのであった<sup>(6)</sup>。

明治九年六月の三井物産発足時、三井組には国内諸産物および海外輸出業務も手がける三井組国産方という部署があった。国産方は、上記の呉服商売の三越とも一部関係を有して、明治七年八月末に開業していたものであったが、三井物産と国産方は業務が大きく重複するところもあるゆえに、明治九年一月に両社は合併することになり、ここにさらに旧三越滞貸金取立方の五名もが合流した。

このようにして、三井物産は、明治九年六月に益田孝が先収会社人員の一部を引き連れてまず設立されたのち、そこに三井組国産方および旧三越滞貸金取立方が同年一月に合流するかたちで成立したのである。

## 二 先収会社の人員

先収会社については、体系だったかたちで編集された「社員人名録」の類は見つかっていない。だが大阪店については、【史料1】のような明治八年一月下旬段階での人名録的なのが三井文庫に残されている。

### 【史料1】

書記課

一月給五十円

森清蔵

勘定課

一〇二十円

吉益尚房

出納課

一 〇二十二円

川宮三六

一 〇七円

鮎川弥八

売買課

一 〇二十五円

増田幸七

一 〇二十五円

阪本平助

一 〇十五円

児島嘉助

一 〇十五円

山口精三

倉庫課

一 〇八円

金子弥一

雑務課

一 〇十円

大槻富太郎

一 〇十五円

吉田仲規

若イ者

一 〇三円

田中政兵衛

一 〇三円

木村新七

一 〇二円二十銭 子供

藤井梅吉

一 〇壹円七十五銭

久富啓太郎

- 一 〇 壹円十銭      〇 福井尚吉
- 一 〇 壹円十銭      〇 牧田常吉
- 一 〇 二円二十銭    下男 山内留吉

右大阪社人員

大津支社

- 一 〇 二十五円      岡崑鴻一郎
- 一 〇 十五円      秋本弘輔

右一月廿三日取極候也

一月廿三日      頭取席<sup>(7)</sup>

この【史料1】は各人の月給額も明記されているので、大阪店内での序列が子供（いわゆる丁稚）まで含めてわかる興味深いものである。これによると、この時点で大阪店には頭取の吉富簡一のほか一九名、さらに大阪店の出張店としての大津支社に二名がいたこと、また子供（丁稚）の上に「若イ者」二名、さらに雑用をこなす下男がいたことが判明する。

一方、東京本店については、三井文庫所蔵の先取会社帳簿（LEDGER）の中に、先取会社がかまさに解散しようとしていた明治九年二月末、解散に際して、解散時以前の慰労も含めての賞与的な「慰労金」「手当金」が配分されたとき、だれにいくらが配分されたを記した部分があるので、これによって東京本店にいた者の人名が具体的にわかる。一部、大阪店の者も含んでいるが、その該当部分を以下に【史料2】として示しておく（原史料では慰労金、手当金の

金額も含めた記録は横書きで算用数字が使われているが、ここではすべて漢数字で表記した。<sup>8)</sup>

【史料2】

明治九年二月二七日

明治七年課長慰勞金トシテ雲行兼治江遣ス 七〇円

同断三百六十円ノ内貸金三百五十円差引残り櫻井邈江遣ス 一〇円

明治七年中純益金ノ内大阪支店社員江分賦金トシテ遣ス分同断江回ス 一四〇二円

同年中課長慰勞金トシテ三百六十円櫻井江遣スヘキ所、前書ノ金高同人江貸金有之ニ付、貸借勘定江回ス、但十円八正金ニテ渡ス 三五〇円

同断慰勞金トシテ堀精照江遣スヘキ所、同人江貸金有之ニ付、貸借勘定江回ス 二八〇円

二月二八日

同断吉田仲規江遣スベキ処、同人江貸金ノ分百〇三円六十銭差引、残三十六円四十銭大阪江送ル 但、日記帳ニ明記ス

一四〇円

同断慰勞金トシテ古谷龍三江遣ス 一四〇円

〃 〃 伊東彦七 〃 三七円五〇銭

〃 〃 中泰輔 〃 八〇円

〃 〃 早川忠七 〃 四〇円

〃	〃	出口保三	〃	一七五円
〃	〃	馬越恭平	〃	五〇〇円
〃	〃	平田喜十郎	江三百円遣スヘキ所、同人江前書ノ金高貸金有之二付、貸借勘定江回ス但、残り式	
百八十八円八正金ニテ渡ス	一二二円			
同断慰勞金トシテ河宮三六	江遣スヘキ分大阪江回ス	五〇円		
同断手当金トシテ山尾熊三	江遣ス	四〇円		
〃	〃	秋本俊輔	〃	五円
〃	〃	田中房吉	〃	一〇円
〃	〃	川崎角藏	〃	一〇円
〃	〃	吉田三之助	〃	七円
〃	〃	大川源之助	〃	七円
〃	〃	中田桃作	〃	五円
〃	〃	鈴木澱次郎	〃	五円
〃	〃	坂田彦藏	〃	五円

二月二十九日

明治七年中課長慰勞金トシテ平田喜十郎江四百円遣スヘキ所、青森商事不都合ニ付…(略)…  
 同年当社創立ノ際種々尽力ニ付、寸志トシテ小泉勝三郎江遣ス 三〇円

古谷龍三ヨリ：(略)：

三月三十一日

明治七年中慰勞金トシテ増田勇助江遣ス 二〇〇円

同断手当金トシテ長尾一江遣ス 三〇円

先収会社には他に横浜支店があつたとされているが、そこに実際どんな人が勤務したのかについては史料を欠く。

【史料1】と【史料2】は、記録の対象時期に一年余りの開きがあるのだが、先収会社に、具体的にどんな人がいたのかを知る手がかりを与えてくれる。これら二種の史料に加え、先収会社に在籍したことが知られている井上馨、益田孝、木村正幹、羽太紀克、富永冬樹、藤田伝三郎ら六名を加え、さらにそれら人員について、総裁井上馨と同郷の長州出身であることが判明する者に黒丸マーク、明治九年の三井物産開業後そこで勤務したことが判明する者に白丸マークを付し、その他、筆者が知り得た情報を備考欄に追記して作成したのが第1表である。

第1表は、あくまで【史料1】【史料2】に依拠しているので、当然ここに載っている者以外にも人員がいた可能性は高い。しかしとりあえず第1表からは、先収会社には、想像以上の数の人員が勤務していたということが判明する。先収会社に関するもつとも体系だった研究のひとつである田村貞雄氏の論稿では、先収会社大阪店には同店頭取吉富簡一のもと藤田伝三郎が、また東京本店は「頭取は、益田孝であるが、その下に木村正幹、羽太紀克、富永冬樹らがいた。」と記されていて、従来それほど多人数が在籍したようなイメージは抱かれていなかったように思われるが、第1表は子供(丁稚)も含めて五〇名程度の人員がいたことを示している。

第 1 表 先取会社の人員

	人名	職位	長州系	三井物産 在勤	備 考
1	井上馨	先取会社総裁	●		
2	益田孝	東京店頭取		○	
3	木村正幹		●	○	井上馨の招きで京都府勸業課大属から転職.
4	羽太紀克			○	大蔵省で益田の下僚.
5	富永冬樹				益田孝の義兄.
6	馬越恭平			○	
7	櫻井逸				
8	平田喜十郎				
9	堀精照				
10	増田勇助 ?				
11	出口保三				
12	古谷龍三		●	○	
13	中泰輔				
14	雲行兼治 ?				
15	早川忠七			○	明治 9 年頃「伊達」と改姓. 先取解散時に渡米. その後、物産入社.
16	山尾熊三			○	先取解散時に渡英. 海外滞在中に物産入社.
17	伊東彦七		●	○	
18	長尾一			○	
19	田中房吉			○	
20	川崎角蔵				
21	吉田三之助				
22	大川源之助				
23	秋本俊輔				
24	中田桃作			○	
25	鈴木澁次郎				
26	坂田彦蔵				
27	吉富簡一	大阪店頭取	●		大阪で長州藩の勘定方をしていたといわれる.
28	藤田伝三郎		●		

29	森清蔵	大阪店書記課	●		長州藩の井上馨隊「鴻城軍」総督。
30	吉益尚房	大阪店勘定課			
31	川宮三六	大阪店出納課			
32	鮎川弥八	〃	●		日産コンツェルン総帥鮎川義介の父。
33	増田幸七	大阪店売買課		○	
34	阪本平助	〃			
35	児島嘉助	〃			
36	山口精三	〃			
37	金子弥一	大阪店倉庫課	●	○	
38	大槻富太郎	大阪店雑務課			
39	吉田仲規	〃			
40	田中政兵衛	大阪店若イ者			
41	木村新七	〃			
42	藤井梅吉	大阪店子供			
43	久富啓太郎	〃			
44	福井尚吉	〃			
45	牧田常吉	〃			
46	山内留吉	〃			
47	岡寫鴻一郎	大津支社			
48	秋本弘輔	〃		○	

(資料) 人名と職位に関する史料については本文参照。

(注) 史料上、先収会社に勤務していたと断定できない場合、その人名の右側に？マークを付した。

(備考欄参考文献) 木村正幹と早川忠七＝木山実「伊達忠七と草創期三井物産の海外展開」阪田安雄編『国際ビジネスマンの誕生』東京堂出版、2009年。  
 羽太紀克＝『稿本三井物産株式会社100年史』上、日本経営史研究所、1983年、27頁。  
 富永冬樹と山尾熊三＝木山実『近代日本と三井物産』ミネルヴァ書房、2009年、194頁、92-93頁。  
 吉富簡一＝佐々木誠治「三井物産会社の生成事情」『国民経済雑誌』第103巻第6号、1961年、39頁。  
 森清蔵＝田村貞雄校注『初代山口県令中野梧一』マツノ書店、1995年、338頁、344頁。  
 鮎川弥八＝『私の履歴書』経済人9日本経済新聞社、1980年、12頁。

またこれは十分予想されたことであろうが、先収会社の人員には、長州出身の者が散見される(表中、黒丸マークを付した者)。例えば、第1表の数字32の鮎川弥八は、のちに日産コンツェルンを築くことになる鮎川義介の父親とみられる人物である。鮎川義介自身が「私の母仲子は井上馨の姉の二女で、若く鮎川家にとつて」<sup>10)</sup>だと語っており、川弥八は井上馨と縁戚関係にあったことから一時的に先収会社に雇用されていたものと見られる。他にも、第1表の番号3の木村正幹、番号29の森清蔵などは、井上馨との関係がきわめて強いといつてよい人物である。第1表では、長州出身と判明するものだけに黒丸マークを付しておいたが、他にも長州出身のものは、もつといたのではないかと思われる。

東京本店を事実上取り仕切っていた同店頭取益田孝とのコネクションが強くて雇用されていた者も何人かいる。表中の番号4、5の羽太紀克、富永冬樹などである。

さらに表中の番号15の早川忠七という人物は、愛知県出身だが明治初年に京都・西陣織の織屋に奉公に上がっていた時、長州藩出身で当時、京都府勸業課大属であった上記の木村正幹とコネクションが出来て、先収会社入りした人物である。<sup>11)</sup>このように井上馨、益田孝以外の者とのコネクションをもつて先収会社入りしたのもいたのであり、彼らの来歴は、かなり多彩である。

そしてこの第1表に載っている人物のうち、明治九年に三井物産が創業した後、三井物産で勤務したことが判明する者(表中、白丸マークを付した者)の数は、益田孝以下一四名にのぼる。先収会社から三井物産入りした人員について、由井常彦氏の論稿では、「三井物産の社員として勤務し続けたのは、馬越恭平のほかは羽太紀克、古谷龍三ら五、六人に過ぎない」<sup>12)</sup>とされていたが、実際はもう少し多くいたことになる。ただし、この一四名には、先収会社解散時に海外渡航した後、三井物産が設立されることになって、改めて三井物産入りした先述の早川忠七、および山尾熊三

(表中番号16の人物)のような人員もいて、一四名全員が先取会社からそのまますぐに三井物産入りしたというわけではないので、事情はやや複雑である。

### 三 三井物産草創期の人員

明治九年に三井物産が開業したときの人員数については、『三井物産小史』で「三井物産会社開店当時の使用人数は総数僅か一六名」<sup>(13)</sup>であったと記されている。この開業時の使用人数が一六名であったということには典拠が記されていないのだが、三井物産開業以後の業務日誌である「日記」の明治九年九月二日の条に、次のような記録がある。

#### 【史料3】

一、当社々員<sup>註</sup>是迄月給之外ニ賄料支給いたし制規之処、以来相廢し左之通月給増加いたし候事

金五拾貳円	羽太紀克	金三拾七円	馬越恭平
金三拾貳円	古谷龍三	金三拾貳円	坪内安久
金貳拾七円	金子弥市	金貳拾貳円	木田幾三郎
金拾七円	伊東彦七	金八円五拾銭	長尾一
金八円五拾銭	水谷伝七	金八円五拾銭	岩鼻敏
金六円五拾銭	三河耕助	金六円五拾銭	藤原庄助
金四円五拾銭	高山忠藏	金四円五拾銭	井上音三郎

金四円

田中房吉

金三円五拾銭

田中熊吉

×<sup>(14)</sup>

ここに総括(社長) 益田孝、副総括(副社長) 木村正幹を加えても総勢一八名ということになる。右の【史料3】は開業時から二ヶ月ほどたった時点での記録ではあるが、開店時の使用人が一六名というのは、おそらくは、この史料に基づいているのではないかと思われる。この後も順次、人員数は増えたようで、さらに第一節で述べたとおり、この明治九年の十一月半ばに、三井組国産方と旧三越滞貸取立方の者、計五一名が合流するので人員数は一挙に増大する。この五一名の合流後の三井物産社員人名録の類は、明治一〇年、一一年、一二年の「社員分賦金」リスト三種が『三井文庫論叢』第四二号に掲載されている。だが体系だつて編纂された人名録として最も古いものは、明治一三年刊行『東京商人録』に掲載されているものである。これは国内外店舗支配人はもちろん、東京本店内の米方、売買方、勘定方というような各セクションの支配人も含めた三井物産上層部の肩書きを有する者がわかるもので、便利な史料である。この『東京人名録』に名が挙がっているものに、三井組国産方と旧三越滞貸取立方出身の者を「旧三井」と総称し、その「旧三井」出身者には黒丸マークを付し、さらに各人について筆者が知り得た情報を「備考」欄に追記して作成したのが第2表である。

この第2表には、明治一三年時点で三井物産に在籍していたはずの副社長木村正幹や馬越恭平、あるいは大阪支店支配人の伴司永造(三井組国産方出身)といった上層部たちの名がなぜか抜け落ちているという不備はあるが、とりあえず『東京商人録』掲載の記録のままで人名を列挙した。

第2表には社長益田孝(史料上、「増田孝」と表記されている)以下八三名の名があるが、この表には手代三等までし

第2表 明治13年人名録

	氏名	職位	支配人関係肩書き	旧三井	備考(主に物産入社前のキャリア)
1	増田 孝(益田)	社長			
2	松岡 讓	番頭一等	函館支店々預り支配人		元幕臣, 元開拓使官吏
3	羽太 紀克	〃	長崎同		
4	坪内 安久	〃	巴里同		元抄紙会社(王子製紙)支配人心得
5	古谷 龍蔵	〃	四日市同		
6	宮本新右衛門	〃	本店米方支配人	●	
7	金子 弥一	〃	香港支店々預り支配人		慶應義塾大阪分校出身
8	伊達 忠七	〃	本店売買方支配人		オーストリア・米国・仏国に滞在歴あり
9	太田原 則孝	〃			中外物価新報担当, 河瀬秀治の推薦で入社, 内務省勸業寮出身.
10	伊東 彦七	番頭二等	本店勘定方支配人		慶應義塾出身
11	増田 幸七	〃	本店米方副支配人		
12	上田 安三郎	〃	上海支店々預り支配人		米国大学出身
13	吉沢 吉五郎	番頭三等		●	
14	福永 文七	〃		●	
15	田中 藤助	〃	馬関支店々預り支配人	●	
16	笹瀬 元明	手代一等	倫敦支店々預り支配人		渋沢栄一の甥, 米国滞在歴あり
17	杉山 佐七	〃		●	
18	新井 新三郎	〃		●	
19	竹泉 嘉平	〃		●	
20	川上 新十郎	〃		●	
21	保坂 弥七	〃			
22	田中長右衛門	〃	兵庫出張店支配人		
23	磯 清五郎	〃		●	
24	深井 太七	〃		●	
25	深澤 森蔵	〃			
26	林 万兵衛	〃		●	明治11年「万丘」と改名, のち「万久」
27	山尾 熊蔵	〃	紐育支店々預り支配人		
28	中野 平蔵	〃			
29	田中 元三郎	〃			

30	岩鼻 敏	手代一等			
31	竹内 恒三	〃		●	
32	月森 龍三	〃			
33	高松 啓助	〃			
34	橋爪 清九郎	〃		●	
35	近藤 英次	〃			
36	木邨 忠蔵	〃		●	
37	近藤 勝敏	〃			慶應義塾出身か. 中外物価新報担当.
38	根岸 半次郎	手代二等			
39	遠藤 大三郎	〃		●	
40	遠藤 彦太郎	〃			
41	松本 常磐	〃			
42	浦岡 榮蔵	〃			
43	福島 與介	〃			
44	中西 善三郎	〃		●	
45	伊藤 清兵衛	〃			
46	山根 暢	〃			
47	高石 紋四郎	〃			
48	松本 喜知造	〃			
49	松田 久兵衛	〃			
50	稻坂 安兵衛	〃			
51	大橋 眞祐	〃		●	
52	水谷 伝七	〃			
53	田中 長太郎	〃			
54	前田 得兵衛	〃			
55	稲富 孝七	〃			
56	豊田 正五郎	〃			
57	中川 喜十郎	〃			
58	加藤 孝平	〃		●	
59	大河内 安貞	〃			
60	井爪 耕作	〃			
61	益田 科三	手代三等			慶應義塾出身か. 外国語能力あり.
62	伊藤 捨次郎	〃			
63	江木 保男	〃			東京の仏学塾出身. 元司法省訳官.

64	又原 大次郎	手代三等		●	
65	田中 孝輔	〃			外国語能力あり、学歴不詳。
66	深澤 藤三郎	〃			
67	長谷 藤吉	〃			
68	野邨 竹次郎	〃		●	
69	岩瀬 順七郎	〃			
70	浅田 逸次	〃			大隈重信の推薦で入社。
71	藤城 良三	〃			
72	内田 鐵太郎	〃			会計見習として太田原取次で明10年5月入社
73	鎌田 徳兵衛	〃		●	
74	柏原 新吉郎	〃			
75	水原 久賢	〃			
76	岩下 清周	〃			商法講習所・三菱商業学校出身
77	渡邊 専次郎	〃			商法講習所・三菱商業学校出身
78	笹岡 雅徳	〃			
79	渡邊 専三郎	〃			
80	星野 遂平	〃			
81	北出 豊吉	〃		●	
82	近藤 直次郎	〃			
83	石光 眞澄	〃			

（資料）「氏名」「職位」「支配人関係肩書き」欄は横山錦柵編『東京商人録』（明治13年）11-13頁に拠る。「旧三井」の欄は、木山実『近代日本と三井物産』ミネルヴァ書房、2009年、82頁。

（備考欄参考文献） 松岡譲＝上記拙著 195頁。坪内安久＝上記拙著 87頁。  
伊達忠七＝木山実「伊達忠七と草創期三井物産の海外展開」阪田安雄編『国際ビジネスマンの誕生』東京堂出版、2009年。  
上田安三郎＝上記拙著 84頁。笹瀬元明＝上記拙著 192頁。  
林万兵衛＝「〈史料紹介〉三井物産会社「日記」第2号」『三井文庫論叢』第42号、2008年、145頁。  
江木保男＝上記拙著 92頁。浅田逸次＝「〈史料紹介〉三井物産会社「日記」第3号・第4号、『三井文庫論叢』第43号、2009年、204頁。  
内田鐵太郎＝「〈史料紹介〉三井物産会社「日記」第2号」『三井文庫論叢』第42号、2008年、207頁。  
岩下清周＝故岩下清周君傳記編纂会編『岩下清周傳』私家版、1931年、8頁。  
渡辺専次郎・実業之日本社編『当代の実業家・人物の解剖』実業之日本社、1903年、160頁。  
これ以外のものについては本文参照。

か表記されておらず、この八三名以外に子供（丁稚）と呼ばれる者も雇用されていたと思われるから、それらも含めると三井物産で勤務した者は、より多かつたであろうと推測され、三井物産が開業四年にして、その人員数はかなり増加していたことが察知される。

表中の八三名のうち、旧三井出身者（表で黒丸マークを付した者）は二二名であるが、上述の通り旧三井系人員は、明治九年一月には五一名の者が三井物産に合流していたから、彼らは合流したのちかなりの者が退職したのであると考えられる。

また第2表では、慶應義塾、商法講習所、仏学塾といった近代的教育機関の出身者とみられるものが散見される。特に慶應義塾と商法講習所の出身者数を比べると前者の出身者の方が多いことが察知されよう。三井物産の人材に関する先行研究では、同社が創業後、商法講習所、東京商業学校、東京高商・商大とつづく、いわゆる一橋系の卒業生を精力的に採用してきたことが強調されてきたが、三井物産草創期については、商法講習所がまだ卒業生を輩出しはじめたばかりの時期であったということもあって、慶應義塾出身者の方が数としては多かつたことが判明する。特に第2表の番号7の金子弥一（香港支店支配人）、番号10の伊東彦七（本店勘定方支配人）については、第1表と突き合わせる、第1表でもそれぞれ番号37と17で名前が挙がっており、この両名は先収会社時代から勤務していた人員ということになる。つまり先収会社時代から慶應義塾出身者が雇用されていたことになるのだが、以下では節をかえて、これら両名が先収会社に雇用された経緯について考察することにしよう。

#### 四 先収会社での慶應義塾出身者

福沢諭吉によって安政五（一八五八）年、江戸の築地鉄砲津に創設された蘭学塾は、その後、芝新銭座に移って慶應四（一八六八）年に慶應義塾と改称した。慶應義塾は草創期の塾生が入塾に際して、出身地、身分（族籍）、年齢、証人（保証人）などをしたためて塾に提出したものを綴じ、『慶應義塾入社帳』として刊行している。そこに前節でみた金子弥一と伊東彦七が差し出したものも収録されており——伊東彦七のものを第2図として掲げておく——、そこから彼らに関する重要な情報が得られる。

本人姓名		伊東彦七	
府縣	山口縣	身介	士族
宿所		父或ハ兄弟姓名	東原富永冬樹
年齢	十五年二月	社中入名月日	明治六年一月二十七日
入社證人姓名	岡田平馬		

（典拠）『慶應義塾入社帳』I、慶應義塾、1986年、624頁。

第2図 伊東彦七の入社（入塾）証明書

入塾していた。入塾したのは明治七年一〇月とのことであるから、彼は先収会社大阪店に勤務しながら、塾の大坂分校に通ったのかもしれない。この金子の場合は、富永冬樹のような、益田と縁戚関係にある者とコネクションを有したということもさることながら、長州＝山口県出身者であったということが先収会社で雇用された要因であったことが予想される。

一方、伊東彦七であるが、第2図からわかるように、彼は山口県出身の士族で、先収会社のさらに前身である岡田組を、井上馨とともに創設した岡田平蔵の義弟であ

る岡田平馬が保証人となつて、明治六年一〇月二七日に東京・三田の本塾に入塾していることが判明する。当時の慶應義塾は現在と異なり、入塾が認められた者は順次入塾する仕組みであつて、『慶應義塾入社帳』によると、この伊東彦七が入塾した日とまったく同じ日に入塾した者が、他に数名いることがわかるのだが、そこには三井物産で勤務することになる益田英作と長尾一という人物が含まれている。

益田英作は益田孝の実弟であり、慶應義塾には九歳五ヶ月という幼少期に兄の益田孝が保証人となるかたちで入塾している<sup>(17)</sup>。益田英作は、明治一一年開催のパリ万国博の出版業務を三井物産が明治政府から委託された際にフランスに派遣された一団に加えられて渡仏し、万博閉幕後もイギリスに留まつてカレッジスクールで勉学を重ねたあと三井物産に入り、その英語力を活かして国内外支店を転々とした<sup>(18)</sup>。

長尾一は、名東県（現在の徳島県や兵庫県淡路島の一部で構成された）出身の平民で、伊東彦七と同じく岡田平馬が保証人となるかたちで慶應義塾に入塾している<sup>(19)</sup>。本稿第一節で三井物産の生成事情を確認した際、明治七年一月設立の岡田組の中心的人物であつた岡田平蔵の義弟岡田平馬も岡田組の出資者に加わつていたことを述べたが、益田英作、伊東彦七、長尾一の慶應義塾への入塾日がまったく同じということから、明治六、七年段階で、岡田平馬や益田孝らが自らの関係者を慶應義塾に入学させる際に連絡を取り合つていたことが想像されるのであつて、それはきわめて興味深い事実といつてよいだろう。そのようにして慶應義塾に仲介されるかたちで、伊東彦七と長尾一は、益田英作やその兄の益田孝とコネクションを維持して、先取会社、さらに続く三井物産でも雇用されることになつたと考えられる。

以上のように、先取会社が慶應義塾の出身者を採用し始めたのは、長州出身であるとか、岡田平馬や益田孝との人的関係などが絡み合つて影響した結果であるといえそうである。益田孝は「父は維新後福澤先生の書記をして居つた

ことがある。慶應義塾の最初の規則は父が書いた。お前のおやちの書いたのがまだ残つて居ると云ふことをよく福澤先生が云ふておられた。」と回顧しており、また彼の実弟の克徳、英作、および子息の益田太郎までが慶應義塾で学んだということからわかるように、益田家と慶應義塾および福沢との関係は明治維新时期以来きわめて深い。

## 五 三井物産草創期における慶應義塾出身者

先収会社時代から雇われていた金子弥一、伊東彦七、長尾一に加え、三井物産開業後には、第2表で示したように近藤勝敏（第2表番号37）、益田科三（同番号61）という慶應義塾出身者とみられる人物たちが雇用されている。

まず長尾一であるが、彼は第1表では名があるが、明治一三年の第2表には名前がない。長尾は三井物産開業後も勤務したが、不行跡があつて明治一一年一月半ばに解雇された。<sup>(21)</sup>

金子弥一は、第2表からわかるように明治一三年時点では香港支店支配人を任されており、一定の語学力があつたと推測されるが、それは慶應義塾大阪分校で培われたものなのであるうか。また伊東彦七については、第2表から、明治一三年時点で本店勘定方支配人に就いていたことがわかるが、慶應義塾は先駆的に西洋式簿記を講じていたことでも有名であるから、そこで学んだ簿記の知識が活かされていたように推測される。また伊東彦七に関しては、三井物産業務日誌「日記」の明治一〇年一二月末の記録として、次のような記述がある。

### 【史料4】

一 伊東彦七横濱江遣し而、拾四番トノ勘定并東洋銀行トノ勘定ヲも相立候事<sup>(22)</sup>

伊東彦七を横浜に派遣して拾四番、すなわちフィッシャー商会ならびに東洋銀行、すなわち英系オリエンタルバンクとの「勘定」について商議させたようなのであるが、これは伊東が外商との交渉で、簿記の知識と英語力も駆使していた可能性を示しているといつてよいであろう。

三井物産が開業時から採用していた簿記の先進性については、従来から指摘があるが、「日記」の同年七月中の記録にも次のようなものがある。

#### 【史料5】

一 杉孫七郎より松野半蔵ト申仁ヲ簿記見習ニ差入呉度頼越候事 自費<sup>(24)</sup>

宮内省官吏の杉孫七郎から自費を支払ってでもいいから、松野という人に三井物産の簿記を研修させてほしいという依頼があったというのである。そのようなすぐれた簿記のシステムを構築することに、慶應義塾で学んだ伊東彦七がいくらか貢献していたといえるかもしれない。

またこの伊東彦七同様に、国内港湾都市での外商との取引において、英語などの外国語を駆使できる人材が必要とされたはずであるが、これに関連して、三井組国産方から三井物産入りし、小樽支店や兵庫支店の支配人などを歴任して、もっぱら米穀や肥料取引に従事した遠藤大三郎(第2表の番号39)が、三井物産草創期の米穀輸出業務に関する記憶として、次のような貴重な回顧を残している。

#### 【史料6】

積出ニ当リテ、ベンチレーターノ手配其他積取船々員トノ交渉一切ニハ通訳ガ入用デ、品川積ノ時ハ上田安三郎氏(當時本店勘定方)又ハ田中孝輔氏ガ当ラレ、兵庫ヤ四日市積ニハ益田品三氏(科三)、下関積出ハ益田英作氏夫々東京カラ態々現場ニ当ラレタ<sup>(25)</sup>

米穀輸出の際に、外国語を話せる上田安三郎、田中孝輔、益田科三、益田英作が通訳として活躍したということであるが、上田安三郎については、アメリカへの留学経験があり明治一〇年一月以降、上海支店に勤務してその後、同店支配人となって活躍した人物として知られている<sup>(26)</sup>。また益田英作についても、彼は益田孝の実弟であることはすでに述べたが、明治六年一〇月に慶應義塾に入り、またイギリス留学歴をもつ人物である。【史料6】の遠藤による回顧がヨーロッパに渡る前の英作のことか、イギリスから帰国したあとの英作のことを表しているのか判然としないが、ともかく益田英作が外国語（英語であろう）を話せた貴重な人材であったことは間違いない。田中幸輔（第2表では番号65）については、まったく史料を欠くが、残りの益田科三（第2表では番号61）については、おそらく慶應義塾出身者と推測される人物であり、在学中に外国語能力を身につけたのか、右の【史料6】でも通訳としての役割を果たしていたことが察知される。さらに彼は上海支店や香港支店に赴任している。

また第2表の番号37の近藤勝敏<sup>(28)</sup>については、やや時期が降る明治一八年九月半ばに益田孝が国内外店舗の人材配置について、上海支店長の上田安三郎あてに書き送った次のような書簡のなかで名前が上がっている。

#### 【史料7】

下ノ関江外国船扱ノ出来ルもの一人差置キ不申而は差支可申、是にも困却致候、口ノ津へ可相遣人物ハ、物価新

報ノ近藤勝敏可然歟、六ヶ月も実檢いたし候ハ、大体ハ熟練可致、左スレハ田中(孝輔—木山注)ハ貴地<sup>二</sup>而少々修業、香港ヲ預ケ候<sup>而</sup>宜く、近日金子も出京いたし候間篤と申合ノ上相決可申候  
英作ハ又来年一二月頃より、折々内地(下ノ関、四日市)等輸出米を始メ候節借用いたし度、同人より外手馴レ候もの無之、是ニも困却いたし居候、然し時々借受ハ貴地<sup>二</sup>而も差支有之間敷と存候<sup>29)</sup>

下関は米穀の積出地として、また口ノ津は三池炭の積出地として、三井物産にとつては重要な港湾であつたが、それらの港湾の店舗に配置すべき人材の不足に困却している心情を益田自身が吐露しており、当時、『中外物価新報』担当であつた近藤勝敏を口ノ津へ配置し、田中幸輔を上海に回して実地修業させた上でさらに香港へ回したい。また下関、四日市での米穀積込の際には弟の益田英作を貸して欲しい、というようなことを述べていたのであつて、先に見た遠藤大三郎の回顧【史料6】と、内容的、人名的に重複するところが多いことから、益田は外国語を駆使できる人材の不足に「困却」しており、そうした制約のなかで、外国語を理解できる数少ない人材の配置に苦心していたといえそうである。

## おわりに

小稿では、三井物産の一方の前身である先収会社、および三井物産草創期の人員について、具体的な人名をあげてどのような人々が勤務していたのかを考察した。

小稿では、先収会社には想像していたよりも多くの人数が勤務していたこと、先収会社は井上馨がトップに就いて

いた会社であったということで、彼の郷里長州出身の者が少なからず雇用されていたらしいこと、さらに先収会社時代から三名ほどの慶應義塾出身者が雇用されていたこと等が新たな知見として得られた。その慶應義塾出身者が雇用されることになった契機としては、ある者は長州出身であることにより、また別の者は、先収会社のさらに前身である岡田組の出資者のひとりであった岡田平馬の関係者であったからというような、きわめてパーソナルな関係に基づくものであったということを描いた。

そして三井物産開業後も、慶應義塾出身者が散発的に採用された。先行研究では、三井物産が創業期から商法講習所の出身者を精力的に採用してきたことを強調してきたが、小稿では商法講習所が卒業生を安定的に輩出する前の時期には、「学校出」としては慶應義塾の出身者が採用されていたことを指摘した。彼らは慶應義塾で身につけたであろう近代的な簿記や外国語の知識を駆使して、三井物産内で丁稚あがりのような在来型の人員とは異なる部署で活躍しうる人材であり、益田孝にとっては、きわめて役にたつ存在だったのである。

三井物産創業後、商法講習所よりも相対的に多くの者が採用された慶應義塾は、明治一〇年代半ば頃から、採用者数でみれば商法講習所にとって替わられていったような印象を受ける<sup>30</sup>。その背景には、日本政治史上有名な「明治一四年政変」で政治家井上馨と慶應義塾福沢諭吉の間に、一時的に亀裂が入ったことが一定程度影響しているのではないかと想像されるが、この点についての考察は今後の課題としたい。

## 註

(1) 梅井義雄『三井物産会社の経営史的研究』東洋経済新報社、一九七四年、木山実『近代日本と三井物産』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、等を参照。

- (2) 近年の業績として、若林幸男『三井物産人事政策史一八七六—一九三二年』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、などをあげることができる。
- (3) 木山実『三井物産草創期の海外店舗展開とその要員』『経営史学』第三五卷第三号、二〇〇〇年。のち前掲拙著に収録。
- (4) 本節における岡田組成立から先取会社発足にいたる経緯については、以下で特に断らぬ限り田村貞雄「政商資本成立の一過程—先取会社をめぐって—」北海道教育大学史学会『史流』第九号、一九六八年、および『稿本三井物産株式会社一〇〇年史』上、日本経営史研究所、一九七八年、二三頁以降、に拠る。
- (5) 安岡重明・木山実「史料紹介」益田孝「備忘録」(写本)『三井文庫論叢』第三〇号、一九九六年、二八二頁。
- (6) 安岡重明『財閥形成史の研究「増補版」』ミネルヴァ書房、一九九八年、二三四頁以下、および二八三頁以下参照。
- (7) 三井文庫所蔵「先取会社規則書類」(物産二二四)。
- (8) 三井文庫所蔵「先取会社 LEDGER (明治九・一〇年)」(物産六二〇)の「慰勞金」勘定。
- (9) 前掲田村貞雄「政商資本成立の一過程」四六頁。
- (10) 『私の履歴書』経済人九、日本経済新聞社、一九八〇年、一二頁。鮎川義介は自身の父親が「鮎川彌八」と名乗っており、「最初軍人を志願し、江戸表に出て兵部大輔大村益次郎のフランス式教練に参加した。しかし生来の虚弱体質ではとうていその「苦役」に耐えられず、涙をのんで県史の下っぱに落ちて行った」(一一頁)と語っている。
- (11) 木山実「伊達忠七と草創期三井物産の海外展開」阪田安雄編『国際ビジネスマンの誕生』東京堂出版、二〇〇九年。
- (12) 由井常彦「明治期三井物産の経営者(上)」『三井文庫論叢』第四一号、二〇〇七年。
- (13) 『三井物産小史』三井物産による再刊、一九六五年、一五頁。『挑戦と創造—三井物産一〇〇年のあゆみ』三井物産、一九七六年、三九頁でも三井物産開業時には「職員わずか一六人」であったと記されている。
- (14) 「史料紹介」三井物産会社「日記」(第一号)『三井文庫論叢』第四一号、二〇〇七年、三三〇頁。

- (15) 例えば『稿本三井物産株式会社一〇〇年史』上、日本経営史研究所、一九七八年、六〇頁などを参照。
- (16) 『慶應義塾入社帳』V、慶應義塾、一九八六年、三二頁。
- (17) 『慶應義塾入社帳』I、慶應義塾、一九八六年、六二五頁。
- (18) 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、六二一―六二二頁
- (19) 前掲『慶應義塾入社帳』I、六二五頁。
- (20) 長井實『自叙益田孝翁伝』内田老鶴圃、一九三九年、一〇頁。
- (21) 『史料紹介』三井物産会社『日記』第三号・第四号』『三井文庫論叢』第四三号、二〇〇九年、二六二頁、明治二十一年一月一八日の条。
- (22) 前掲『史料紹介』三井物産会社『日記』第三号・第四号』二五四頁、明治二十一年二月二七日の条。
- (23) 例えば前掲『稿本三井物産株式会社一〇〇年史』上、七五頁。
- (24) 前掲『史料紹介』三井物産会社『日記』第三号・第四号』一九九頁、明治二十一年七月二日の条。
- (25) 遠藤大三郎『穀肥商売之回顧』私家版、一九二八年、三三頁。史料中の「益田品三」の横のカッコ内は筆者が付した。
- (26) 上田安三郎については、さしあたり前掲、木山『近代日本と三井物産』七五頁を参照。
- (27) 益田科三は謎多き人物である。彼は益田姓を名乗っているが、もともとは荒田姓であったと見られる。京都の商人荒田萬助の長男で「荒田科蔵」科三」という少年が明治七年七月に年齢一二歳五ヶ月で東京の慶應義塾に入塾しており、この際、益田孝が証人になっている（前掲『慶應義塾入社帳』I、六七―二頁）。その後、荒田から益田に改姓したようであり、明治十二年頃以降、諸史料では「益田科三」という人名がしばしば登場する。本文中の【史料6】では「益田品三」として表記されているが、明治十二年五月半ばに彼が三井物産上海支店に赴任する前に旅券申請した際の史料には、「益田科三」と明記されている（外務省外交史料館所蔵史料「海外旅券勘合簿」神奈川県之部〔請求記号三八・五・五一〕コマナンバー一四七付近参照）。また第2表作成で依拠した史料でも手代三等として「益田科三」として明記されている（第2表の番号61一の人物参照）。

明治一三年の三井物産の帳簿（三井文庫所蔵史料「第五号元帳」〈物産六九五〉）の「香港支店勘定」二月六日の条に、「益田科三ヨリ西京荒田文助江弘金」とあるから益田科三がやはり京都の荒田家と関係があつたことは間違いないところである。しかし明治一八年頃以降になると再び荒田科三という人名が登場する——例えば三井物産帳簿（三井文庫所蔵史料「LEDBER」〈物産七一五〉）の「第三滞貸シ金勘定」明治一八年一二月三十一日の条参照。この間、益田孝が一時的に荒田科三を益田家の養子にしていたのではないかと推測するが、史料を欠くので詳しい事情は判然としない。

(28) 近藤が慶應義塾出身であるとみられることは、前掲『慶應義塾入社帳』I、七三六頁。

(29) 東京益田孝から上海上田安三郎宛書簡（明治一八年九月一四日出）。田中康雄（史料紹介）三井物産会社上海支店「内状」『三井文庫論叢』第七号、二一八頁参照。

(30) 明治一三年時点で三井物産に在籍した商法講習所出身者は、第2表でみると番号76、77の岩下清周、渡辺専次郎のみで、それ以前に商法講習所出身者で三井物産入りしたことが確認できるのは、明治一〇年入社山口甫吉、一一年入社の安達何四郎のみである。麻島昭一「戦前期三井物産の学卒者採用—明治後半・大正期を中心として—」『専修経営学論集』第七五号、二〇〇三年、三二一頁参照。

(きやま みのる・関西学院大学商学部)

Abstract

Minoru KIYAMA, *The Staff of Mitsui Bussan at Its Inception*

Mitsui Bussan, which was established in Japan in 1876 and engaged in domestic and international trade, had dominative power in the Japanese economy prior to WWII. This study focuses on its inception period and clarifies that Senshu Kaisha, a predecessor of Mitsui Bussan, had a much larger staff than had been previously supposed. This study also asserts that Senshu Kaisha and Mitsui Bussan, in their inception periods, had employed some graduates of Keio Gijuku. It is supposed that those graduates had studied Western-style bookkeeping and foreign language in Keio Gijuku, and that they had therefore played an important role in the accounting or foreign trade departments of Mitsui Bussan.

